



(4) 人文科学、社会科学、自然科学、総合科目についてどのように考えるかについては、「現在のままでよい」が最多で、「医学に直接関係ないので減らしてもよい」がついで多い。もし減らすとすればどの科目かについては「人文、社会科学および総合科目」との回答が多い。

(5) 医学部では、自然科学系の物理学実験、化学実験、生物学実験のそれぞれ1単位を修了要件として課しているが、実験科目についてどのように考えるかについては、「現在の科目数および単位数でよい」が大多数を占め、「実験科目は必要ないので開設しなくてもよい」といういわば何もしない（したくない？）との回答も数パーセントある。

(6) 外国語科目については、進学課程の修了要件として、英語8単位、ドイツ語またはフランス語8単位を課しているが、このことについては、「現在の科目および単位数でよい」および「もっと語学（特に英語）を重視し、履修単位数を増やして欲しい」が大勢を占める。

(7) 現在の教養課程を履修してあなたは満足のものだったかについては、「ほぼ満足のものであった」と「やや不満が残った」が大部分で、「かなり不満が残った」、「非常に不満が残った」は少ない。したがって、大半の学生がほぼ満足 of いく教養教育を受けたと感じていることが伺える。

昨年度教養教育を履修した今の2年生へのアンケート結果は、基本的には上述したと同様の結果であった。しかし、学生からの意見、改善点および要求でおそらく年々比重を増していることに語学の問題があると思われる。周知のごとく本邦の医学界は古来ドイツ語を重視してきたが、ここ20年くらい前からドイツで出版される学術雑誌ですらそのほとんどが英語になり、ましてや国際学会のほとんどすべてにおいて使用される言語は英語である。したがって、英語教育に関するわれわれの関心は極めて高い。学生の立場においても、彼らがその実態については十分に把握しているとは思われないが、英語教育の重要性についてかなり関心があると思われる。しかし、学生の英語科目に対する大方の意見は、高校教育でやっていたような、あるいは受験の時にやっていたような英語教育はたまらない、である。このことは、われわれ教官側にとって検討に値する課題だと思われるが、学生側にとっても重要な検討課題であろう。つまり、現実的なことをいえば、卒業して医師になり、やがて学位のためあるいは医学

研究のためにいろいろな論文を書かなければならない時期がくる。ところが彼らの論文作成に必要な英語力は十分とはいえない。その原因の多くは、教養課程を含む学生時代における英語教育（特に、彼らの多くが指摘した「高校での、または受験のための英語」）がこのような目的のためには必要なことであることに気がついていないためであろう。彼らの英語科目に対する要求をまとめると、少人数での英会話を中心としたクラスを切望している。多くの科目を履修しなければならない学生がその一部として（せいぜい週に1、2コマ）英会話を学習したところで、実際問題として、英語が話せるようになるとはとうてい思えない。さらにそのような目的のために6つも7つもコマを作る余裕など現在の大学にあらうはずもない。そのような少人数の英会話学習などは大学の正規の授業とは別に興味のある学生自らが民間の英会話教室等に求めるべきだと思われる。このような英語科目に関するわれわれの考えを学生に対し明確に示すべきであり、実際、医学部のわれわれ教官は機会ある度に英語力（特に、読み書き）の重要性を指摘している。

アンケートの内容をさらに細かく分析した結果浮かび上がった傾向は、学生側の要求は非常に過大であるにもかかわらず、自ら学ぼうという意欲（意識）が希薄な点である。例えば、医学的なモチベーションを早めにとの学生側の要求に答えるべく、医学部では医学序説を開講しているが、欠席者が多く、出ている学生でも、単位が簡単に取れるから気休めに取りにくるんだ、ということ率直に述べている学生が少なくない。医学部に入学したのに医学に直接関係ある科目が少ないのでやる気がしない、との意見を重視し、こういう医学関連科目を開講しても欠席者が多い。これらは医学部の学生ばかりではなく現代の（あるいは古今東西の）学生全体の気質を反映しているように思われる。

最後に、これらのアンケート調査をするなかで最も驚いたことは、かなりの数の学生が日本語（日本語）をきちんと書けないことであった。極端な場合、漢字をほとんど書かず（書けず？）全文ひらがなで、どこをどうきって読むのかわからない、という例もあり、国語教育がむしろ必要ではないかとすら思われた。

以上、限られたアンケート調査の結果ゆえ、すべての問題点が明らかにされたわけではないと思われるが、概略は浮き彫りにされた感もあった。今後の多くの課題を見いだした。